

## 地域の会 9/26-27 大飯発電所等視察報告

日にち	平成30年9月26日(水)～27日(木)
内 容	26日(水) 関西電力(株)大飯発電所視察 27日(木) おおい町及びおおい町議会視察
視察参加者	<p>－委員－ 石坂、入澤、桑原、須田、高桑、高橋、竹内、田中、千原、宮崎 10名</p> <p>－オブザーバー－ ・柏崎市 防災・原子力課 杵淵主任 ・刈羽村 総務課 野口主事 ・東京電力ホールディングス(株) 柏崎刈羽原子力発電所 森田副所長 地域共生総括グループ 山本グループマネージャー、徳増副長</p> <p>－事務局－ 柏崎原子力広報センター 竹内事務局長、石黒主査</p>
対応者	<p>26日 関西電力(株)大飯発電所 関西電力(株) 所長室 コミュニケーション 山方課長</p> <p>27日 おおい町及びおおい町議会 ・おおい町 反田総務課長、治面地総合政策課長以下7名 ・おおい町議会 浜上議長、寺井議会事務局長以下4名</p>

- 26日は、関西電力(株)大飯発電所を視察し、安全対策等に関する説明を受けた。
- 視察後の質疑応答では、主に安全対策に関する質問や、1、2号機の廃炉決定に関する質問などがあった。
- 27日は、おおい町及びおおい町議会で意見交換を行い、原子力災害時の住民避難計画や、9月に実施した原子力防災訓練の状況等について説明を受けた。
- 意見交換では、主に地域の経済状況や、いわゆる廃炉ビジネスに対する見通し、事業者との信頼関係等に関する意見や質問があった。
- 委員感想を以下にまとめた。

〈委員〉

9月26日は福井県おおい町にある関西電力の大飯原子力発電所を視察、1号機から4号機までの総電気出力は471万kWで1、2号機は運転終了中で今後廃炉を計画。

柏崎刈羽原子力発電所との違いは柏崎刈羽原子力発電所の原子炉構造が沸騰水型軽水炉（BWR・ABWR）にたいして大飯原発は加圧水型軽水炉（PWR）でありドーム型の形状です。

柏崎刈羽原子力発電所より約半分の号数であり敷地もコンパクトな感じを受けた。発電所の侵入道路も狭く感じられ、廃炉工事の大変さも予想される。

27日はおおい町役場で町職員から災害時における住民避難訓練の様子を映像で説明を受けその後、意見交換となった。

住民避難時のバスでの移動等は想定された時間より、はやめの移動だったとの回答だったが、移動する人数にも関係していたかもしれない。

最後に町議会議長さんのコメントがあり避難訓練実施日は、天候が良い日だったが荒天の日も含め様々な条件での訓練が必要との感想があった。

県とバス運営事業とは避難時の際の締結は終えているとの事、新潟県も他県と情報交換し避難計画の策定を進める必要があるのではないかと。

PAZからの避難道路は橋からの1本だけであり現在トンネル工事が進められている。

おおい町は1、2号機の廃炉により固定資産税1億円、電源立地地域対策交付金10億2900万円、核燃料税交付金約1億8900万円、合計約13億1800万円の歳入減と推計。新たな廃炉交付金約7億円を10年分見込んでも相当額、町の歳入不足になる。

廃炉ビジネスは廃炉工事の終了期間が30年～40年の長期間でありビジネス効果はほとんど見込めないとの回答であった。

〈委員〉

おおい町役場での意見交換の中で、おおい町議会議長が廃炉ビジネスについての答弁で「(おおい町では)大きな企業もないし廃炉がビジネスになるとは、あまり考えたことがない。あるとすれば建設業関係くらいだと思う」との答弁があった。

私は、廃炉・解体には、30年以上の期間を要し、多くの雇用を生むなど柏崎刈羽地域の活性化を取り戻せるのではないかと単純に思い描いていた。しかし、果たして廃炉ビジネスというものが簡単に手に入るのだろうかという疑問が湧いてきた。

2013年ドイツのグライフスバルト原発の廃炉について議員視察を行った際の資料を読み返してみた。

グライフスバルト原発は、1990年に1～5号機の廃炉を決定、6号機は建設完了直後、6、7号機は建設中にストップがかかったという。私たちが訪れた13年の時点で80%まで解体が終わったとの説明があった。しかし建屋はすべて解体が終わり機器の除染作業が行われていた。そして現在(当時)の従業員は500人とのことであった。

廃炉決定から22年、従業員数500人果たして廃炉解体が大きなビジネスになったのだろうか？

また、解体作業は、特別な教育や訓練を受けた人以外は関われないとの説明もあった。

廃炉がビジネスになりうるのかという見極めと国、県、東京電力等との周到な準備が必要であり「廃炉ビジネス」を期待するのは、その先のことではないだろうか。

〈委員〉

大変有意義な視察に参加させて戴きありがとうございました。

原子力発電所＝東京電力でしたが、関西電力さんの施設を見学させて戴きそれに加え、それを迎え入れる地元の市議会や行政の方のお話も聞いたことがとても良かったです。

まず、原子力発電所は広大な用地を誘致しなければならないと思っておりましたが、意外とコンパクトな中に4基もあったことに驚き、最大事故発生時は初期対応として、柏崎刈羽原子力発電所に比べ消防車等に駆けつけることが容易にできるのではないかと通信手段が遮断されても人による伝達も可能なのではとも思いました。しかしながら、協力企業への委託と伺い多少の疑問も残りました。

関西電力さんによりVRによる発電所内を案内していただきましたが、画像を通しての見学なので人の動きもなく、すれ違うことも無く、どこが修正してあっても知ることも無く、気が付くことなどはないと思います。私達は東電さんの見学では、水もれ箇所を通過することもあり、作業員の方とすれ違いながらの見学ですが、これでは関西電力さんの都合に併せて作られたものでの見学ようにも感じました。そして、発電所構内に入らなくともどこでもVR映像を見ることが可能なのではないかと思いましたがいかがだったのでしょうか？

大飯原子力発電所では、森林火災の延焼を防ぐため、樹木を伐採し18mの防火帯を設置したとの説明がありましたが、海岸からの風により大火災となった糸魚川の例もあり、一般の住宅火災とは規模が全く違うと思われ、本当に大丈夫か？と感じました。

大飯町の住民避難マニュアルが、柔らかな黄色の冊子で親しみやすく好感が持て、文字も見やすく、黒での人体ではなくイラストを用いていることも良いと思いました。

大飯町では、関西電力と一体化した行政運営の様子が手にとるように解りましたが、今後も裏切られることはないのだろうか？1・2号機の廃炉までは30年ですが、その後は3・4号機の廃炉の時期もやって来ることから、人口減少の中、原子力発電所だけでない新たな産業の構築にいち早く取り組むことが急務であり、柏崎・刈羽も電源立地としてたどる道は同じなことから、一段と緊張感を持って行政運営に耳を傾け、風通しの良い行政運営を求めたいと思いました。

〈委員〉

大飯原発視察では、1、2号機は廃炉が決定されており、加圧水型（PWR）では、タービンと発電機のある建屋は放射能汚染されず管理区域ではないため、解体時に放射性廃棄物の量が少なくは済む（96%が一般の産業廃棄物の扱い）との説明を受ました。また、次の日の原子力広報センターの展示にて、PWRとBWRを比べてみることで、柏崎刈羽原発のようなBWRは構造上のリスクが高いと改めて感じました。

## PWR（大飯原発）

- ① 岩盤に当たるまで掘り下げ、直に原子炉格納容器を固定している原子炉圧力容器の底に近い所には配管はない
- ② 原子炉建屋の天井を丸くして水蒸気爆発がしにくい構造になっている
- ③ 制御棒を原子炉圧力容器の上から挿入する（重力に逆らっていない）
- ④ 使用済み核燃料プール保管の建屋が別にある
- ⑤ 放射線管理区域は原子炉建屋までで、廃炉の際の放射性廃棄物が少ない

## BWR（柏崎刈羽原発）

- ① 原子炉圧力容器の底に近い所に配管が多い
- ② 原子炉建屋の天井は平らであり、水素や水蒸気などのガスが充満した際の圧力に耐えられる構造にはなっていない。
- ③ 制御棒を原子炉圧力容器の下から挿入（重力に逆らっている、構造上圧力容器の底が弱そう）
- ④ 使用済み核燃料プールが原子炉建屋の3階にある
- ⑤ タービン建屋も放射線管理区域であり、廃炉の際の放射性廃棄物の量が多くなる

大飯町がなんとか 8000 人余りの住民を避難できる体制を作ろうと懸命に考え、同時に原子力災害の避難の困難さも理解し苦悩しているように思いました。UPZ の避難が 20～500 $\mu$  Sv/h の中で行われることについて、プルームの状況をモニタリングしながらタイミングを見て指示しなければならないとのことで、その状況下での判断は町の職員が本当に悩むことになると感じました。

また消防団員が屋内退避時屋外での広報にあたることになっており、定期的な研修を受けて原子力災害時の対応についての使命感を持っているというお話に、原子力災害では、命や健康を守ろうとする使命感や責任感のある人ほど傷つくことを改めて思いおこし、胸が痛くなりました。

柏崎刈羽原発周辺の人口規模を考えれば、稼働中の原発の事故で短時間に避難を完了することは到底不可能であり、柏崎刈羽原発を再稼働せずに停止中の事故への対応を整えていくことが現実的だと感じました。

## 〈委員〉

### 1. 大飯原発の特徴

- (1) 解放基盤面に直結：大飯原発は岬の先端に位置し、山を削り取って建設されていました。取水口は岩場の入り江を利用するほどの岩山です。「強固な岩盤」に建設したというので、大飯原発の「解放基盤面」を調べたら、なんと海拔プラス 4～6m となっていました。柏崎原発の「解放基盤面」はマイナス 200～300m でした。「解放基盤面」というのは、地震の時の横揺れ（s 波）が伝わる速さが 1 秒間に 700m 位の地盤のことです。私たちが生活している第四紀層の硬い地層で秒速 300m 位だそうですから、かなり固い地盤に建設されていることがわかります。柏崎原発は「解放基盤面」である地下 200～300m も深くに建てるわけにいかず、海拔マイナス 40m 位のところに建てたと聞きますから、驚く柔らかさです。

その点、大飯原発は液状化や不等沈下対策のない原発であることが確認できました。

- (2) 狭隘な敷地：事故の緊急事態にはワンフロアタイプがよいと思いますが、大飯の免震重要棟は6階建てと聞きました。6階と言うのは活用しにくいように思いました。地盤は強固ですが岬にあることが、敷地を広く取れない弱点になっているように見えました。
- (3) 格納容器の大容量化：1, 2号機はアイスコンデンサと言う格納容器の冷却方式を取ったことによって容器を小さくした。しかし、新規制基準では格納容器の耐圧性強化が求められました。壁を厚くする技術と採算から廃炉を決定したといます。3, 4号機は、アイスコンデンサ方式によらず、格納容器の大容量化と特別強化壁にしていたため合格したと聞きました。このような説明を聞くと、柏崎原発6, 7号機は、大飯原発と違って改良型BWRですが、格納容器については、5号機つりがね型格納容器より容積は小さいと聞きました。圧力容器内で高圧縮された蒸気が出た場合、耐えられるようになっていないか心配になりました。

## 2. 原発集中地での避難訓練

- (1) 事故対応の難しさ：大飯、高浜と近接していますが、立地自治体が違います。同時事故の場合、原発での事故の進展や自然災害での人的物的被害が違いますから別々の対策本部の対応でよいと思いますが、放射能の放出が一方が早く、もう一方に流れた場合など指令を一本化しなければ適切な対応できません。柏崎原発の事故とは違う難しさがあると思います。
- (2) 渋滞対策の訓練：かなり大規模な訓練がスムーズに行われたようですが、試験的な訓練も必要ではないでしょうか。広域避難で心配されることは、ほぼ同時に大量に出る自家用車が渋滞に陥ることです。大量の自家用車の参加を持って渋滞対策を検証してほしいと思いました。これは、新潟県で行う避難訓練でもいえることです。

## 3. 廃炉ビジネスについて

大飯1, 2号機は廃炉だと言いました。廃炉ビジネスに期待があるかと議会議長に質問したところ、「一部土木業者の仕事はあるが、多くは大企業でなければできない仕事ばかり、ビジネスと言うほどのものか」と冷ややかな答が返ってきました。原発に依存した自治体の議会として、冷静に考えていると感心しました。柏崎では「再稼働で稼ぎ、廃炉で輝く」と廃炉に期待する意見がありますが、大飯町議会の見解が当たっていると思いました。

### 〈委員〉

新潟県とは比べ物にならない程多数の原子力発電施設が存在するという状況下で、福井県では県・立地市町村・発電事業者の関係が新潟県に比較して良好であり、同じ方向を向いているとの印象を持った。それは国のエネルギー基本計画における原子力発電の位置付けについて、これまでは推進・現在は維持という方針のもと自負と誇りをもって協力している事である。その背景には事業者が福島で事故を起こした当事者でなく、また炉型の違いに拠る安全性に対しての信頼感も柏崎刈羽に比較して高い事もある。当然、国側から地域への対応も良好なものとなり、今回の避難訓練への協力や、県下の様々なところに設置された広報・研究開発など原子力関連施設の多さにも現れている。

他方、その関係が馴れ合いに陥ってしまう事の危険性も考慮すべきとも考えられる。大きな不祥事・問題が発生した際に果たしてチェック機能が働くのか否か、そこに地域住民の意見が介在する余地はあるのか。今回一般の地域住民から話を聞く機会がなかったこともあって我々地域の会からすると当然のようにその事についての疑問が湧く。

福島事故以降、国は原子力規制委員会と規制庁創設により推進と規制を分離させた事で事業者への監視という面での対策を行った。が、(紳士協定ではあるものの)「地元の同意」が原子力発電所稼働の条件となっている状況下で、事業者への信頼感が大きく損なわれた地域においては、住民が何らかのかたちで参画するプロセスは必要とされ、歴史は古いが地域の会もその一形態に位置付けられるといえる。

そう整理すると、前述のように事業者に対する地域住民の信頼感、経済的な見地含めて総合的に判断するところの地元受け入れ容認が多数である地域においては、この福井県のような環境になることはごく自然な事なのではないかとの思いに至った。

但し、この状況が今後変化していく可能性はゼロではないだろう。

大飯1・2号機のみならず高浜1・2号機に加えて事業者は違うがもんじゅの廃炉が決定した事。特にもんじゅの廃炉は国の原子力政策という住民の信頼感の根幹にかかわる事だけに、福井県民の意識の変化もあり得る。

また、エネルギー基本計画の中では仏C L Iや英S S Gなどが明記され住民参加の地域における情報共有強化がこれまでも謳われている。

その中で、今後福井県において地域の会のような住民参加型の組織が設置されるとすれば、その設置者には委員人選のバランス感、運営の透明性と公平性に加え独立性への十分な配慮をお願いしたい。

福井県での状況は柏崎刈羽と大きく異なるが、今回のような他地域の状況を見ることによって我々の会の姿勢や目的を再確認する事ができた。

今後も事業者の不祥事や安全性向上を損ねる事象が無いように厳しい視点を以って見守る事と同時に、安全性向上に対する真摯な努力に対しては市民の立場からも支援し協力する姿勢を保ち、その結果として発電所の安全性向上を目指していきたい。

〈委員〉

26日：関西電力大飯発電所、27日：おおい町役場及びおおい町議会を視察しました。私たちのために貴重な時間を費やし対応して下さいましたことに感謝しています。

視察内容を印象に残っている範囲で3項目にまとめてみました。

・大飯原子力発電所について…構内をVRスコープも使いながらバスで見学しました。

1・2号機は2017年12月に廃炉決定、2018年3月に運転が終了していません。2018年3月以降3号機・4号機が再稼働しています。この3・4号機は、2014年5月に福井地裁が運転差し止めの判決を出し、4年後の2018年7月名古屋高裁金沢支部により差し止めを認めない判決が出され話題となった原発でもあります。

新規制基準に沿うよう取り組んでいることは柏崎刈羽原発と共通、柏崎刈羽原発と違う点で印象深かった事は、敷地が岩山に囲まれている地盤で、原子炉は岩着出来るまで掘って建てられている事、PWRの特徴かもしれません

が安全対策設備も含めて全体がコンパクトにまとまっている事の2点でした。また、稼働中の現在、正式な緊急時対策所と免震事務棟が建設中でした。

・廃炉に関する事について…26日と27日の質疑応答の中で話題になりました。

大飯原発見学後のやり取りでは、1・2号機タービン建屋は普通の産廃の取り扱い、原子炉は放射性廃棄物なので処分方法も行き先も決まっていない。最終的には更地に戻し、その後の関西電力としての利用方法は、決める状態でない。

議会議長とのやり取りでは、廃炉によるマイナス要素対策が必要と考えている、交付金に関する意見書を出している。廃炉ビジネスに関して、町としては関係あるとしたら土建業者に少し恩恵があるか、会社は宿舎を持っているので民宿の利用も期待できない、ビジネスとしての期待は持てない。(補足：再稼働に関しては、稼働していると定期検査で地域がやっていけるとのことでした。)

・住民避難計画について…町の総務課の方々から、おおい町“原子力災害時における住民避難計画”と避難訓練の様子の説明を受けました。

住民避難計画については、原子力防災対策指針に基づいているので他の地域の避難計画と大きな違いはないが、大飯町独特のものとして避難対象区域に重なりがある(大飯原発のPAZとUPZであり高浜原発のUPZ)、また美浜原発事故の際の受け入れ側となっている、避難は小学校区単位で行うとの説明がありました。避難区域対象者は、大飯原発ではPAZ:736人、UPZ:7552人、高浜原発では全町域UPZで8288人です。

避難訓練については、8月25、26日に国の総合防災訓練が行われました。地震による大飯原発と高浜原発の同時事故を想定しての訓練で、参加者は全員で21600人、その内大飯町352人(PAZは121人)、要支援者や児童のバスによる避難、消防団によるUPZの屋内退避の指示、車や人のスクリーニングの様子などDVDで見ることができました。初めて県外避難の実動訓練もできたとのことでした。どの様な問題点があるかお聞きする時間はありませんでしたが、高線量下での避難に係る人の対応など細部の検討は不十分な様子でした。避難計画は改定を重ねていくし、避難計画に関して、徹底できるように町のローカルで今回のDVDをしつこいほど流しているとのことでした。

2日間の視察を終え思ったことは、大飯町民の声を受け止める場はどうなっているのかの疑問と同時に地域の会と県の原子力災害時の避難方法に関する検証委員会の存在の意義です。

地域の会では、オブザーバーである国・自治体・東京電力に住民の疑問や意見を直接伝えることができます。

避難に関して、検証委員会で住民が安全に避難できるのか避難計画の検証が行われるはずです。

原発立地地域に地域の会がある事、県レベルで避難計画の検証がなされる事の意義は大きいと思いました。

〈委員〉

9月末日、福井県大井町、大飯発電所の見学にいったまいましたので、感想を述べさせていただきます。今回は地域の会の視察研修会ということで参加させていただきましたが、色々改めて考えるところが多くなった視察となりました。行程については、26日早朝に柏崎出発、エルガイア大飯という

関西電力の科学館（エルガイア大飯）見学、大飯発電所見学、ホテルにて一泊、地元の市議さんと意見交換、体験施設（アットホーム）見学、帰路という流れでした。

先ずは行きのバスの中での話なのですが、いつもは会議の場でしか顔を合わせないので、なかなか反対している方の意見をゆっくりと話す機会は少ないのですが、今回はお隣の席になりましたので約 5 時間、ゆっくりとお話を聞かせていただきました。私は正直、原子力に反対している方々は絶対に戦争が起きない事を前提にして原子力に反対していると思っていたのですが、その方は戦争を忘れさせないための紙芝居を作ろうとしているとのことで、原子力は反対、戦争も反対と、私の根底にある戦争を避けるための資源分散化という考えや、反対派の方は戦争が絶対に起きないから原子力に反対しているのだろうな。という考えを改めてくれましたし、手伝えることがあれば手伝いたいとまで感じました。

福井に入って最初に見学したのはエルガイア大飯という関西電力の宇宙や科学を学べる施設でした。元々は昼食の時間でしたが昼食の時間を少し削って個人的に見学させていただきました。この施設は宇宙戦艦ヤマトの作者が絵を描いたキャラクターもいて、子どもたちがたくさん来ているそうです。シアタールームでは化学やエネルギーについて学べる映像を流していましたし、私にとっても学のある時間となりましたし、宇宙を学べる施設においては様々な体験を通して楽しく宇宙の仕組みなどを体験することが出来ました。純粋に柏崎にもこんな施設があったらいいなと感じました。

次に大飯発電所に見学に行ったのですが、構内見学をする中でバスに乗ったまま VR で見学をするという事を初めて体験させていただきました。運転中ということもあり中までいけないのかな？とも思いながらこの見学法は本当に分かりやすく、理解しやすいと感じたので、是非とも東京電力にもまねしてほしいと感じました。また、大飯発電所では海水淡水化装置というものが取り入れられていて、飲料水を海水から作っているそうです。今後世界ではきれいで安価な水をいかに提供するかが問題になりつつある中で、この取り組みについても非常に関心を持ちました。

翌日は地元市議さんとの意見交換から始まったのですが、特に印象に残ったのが大規模な避難訓練についてでした。きっと色々なハードルを超えての実施だったと思うのですが、今回私たちが県からの支援の下視察に行かせてもらったからには、こういう避難訓練を私たち地域の会も実施するために何かしら要請や協力をすべきだと思いましたし、地域の会としても、青年会議所としても避難訓練をするような依頼があれば前向きに協力できるのではないかと感じています。

最後の見学場所としてアットホームという電気や資源、エネルギーのことを学べる施設にお邪魔したのですが、こちらの施設はすべてが体験型で、子供から大人までいろいろと楽しみながら学べるようになってとても良い施設だと感じましたし、案内してくれたスタッフの方もとても気さくで案内慣れしていましたので、是非とも東京電力も参考にしてサービスホールを楽しく学べるように、子供たちが来たいと思えるようにしていただきたいと思うと同時に、すぐできることとして、スタッフの方が肩にスピーカーをかけてマイクを使って案内していたのですがとても聞き取りやすく、これは東京電力にまねしてほしいなと感じました。

最後になりますが、今回視察として福井県に視察に行ってきましたが「ただ単に勉強になりました。」ではいけないと思います。ほかの勉強会や視察会、



日々の地域の会にも通じることですが、この活動を経たうえでより発電所の安全性を高めるため、または県民の安心を高めるための何かしらの行動が重要だと思っています。

今回の視察に関して具体的に考えるのであれば、行政関係の皆様にはもっとエネルギーや資源、世界の情勢を学べる環境や施設を新潟県内各地に作っていただきたいと思えますし、今ある施設においても体験型の導入や漫画家とのコラボを取り入れて集客力を高めてほしいと感じました。発電所や事業者においては見学者に対してより分かりやすい説明環境の導入や理解活動の促進やアットホームのように様々な組織、事業者が連携してのPR館の創設を検討していただきたいと思いました。そして私たち地域の会においては避難訓練を実施することに対して国や県、市に対して何かしらの要請をしていくべきだと感じていますし、協力できることは前向きにお手伝いしていくべきだと思います。

以上、長文になりましたが今回の視察の感想となります。ご一読いただきありがとうございました。

#### 〈委員〉

福井県はもんじゅ、ふげんを含めて敦賀発電所、美浜発電所、大飯発電所、高浜発電所の6ヶ所の原子力発電所を抱えています。

今回の視察は大飯発電所とおおい町に行ってきた。

特に二日目のおおい町では町の財政や経済が原子力発電所と深く関わっている事と、8月25・26日に行われた国との合同原子力防災訓練についてお聞きできて、いままでの視察とは又別な意味で充実した意見交換が行われたことを企画された方々に感謝致します。

大飯発電所は1,2,3,4号機の内1,2号機は今年3月にすでに運転停止をしています。原子炉型式はPWRで柏崎刈羽のBWRと異なり燃料棒に直接接触する水と沸騰し蒸気となってタービンを回す水が、完全に分離されているのが特徴です。

又、PWRの格納容器は同出力のBWRと比べ約5倍の容積を持っていて、水素濃度や圧力が上昇しにくく、したがってベントラインは設置されていません。格納容器はドウム形状になっていてタービン建屋の脇に大きく建っています。

小浜湾先端に突き出た山間の敷地に建っている発電所は柏崎刈羽発電所のBWRでは必要な高い排気筒がない為コンパクトになっていました。

おおい町では「原子力災害時における住民避難計画」の説明を受け、おおい町議会議員の皆様との意見交換を行いました。

住民避難計画では、PAZ圏の住民は家から自家用車で避難し自家用車は一時置き場までとしてバスに乗り換えて最終避難地に向かうことになっていました。

UPZ圏の住民のスクリーニング及び除染はUPZ圏の境界周辺に設置を基本として現在場所を選定しているそうです。

又、住民向け避難マニュアルにはPAZの住民の各施設敷地緊急事態に自衛隊車両の活用も記載されています。これらは柏崎市の住民に配布されている「原子力災害編防災ガイドブック」には無い項目です。

意見交換会では現在は町と事業者の関係がいたって良好であり、信頼関係が培わされているとこのことを聞きました。

使用済み核燃料の長期対策交付金制度には現在おおい町議会議長の浜上雄一様のご尽力があったとのこと。

又、1,2号機が運転終了になっているが柏崎でも話題になっている廃炉ビジネスには、おおい町としてメリットが見い出せなく関心がないとのこと。

#### 〈委員〉

この度は貴重な経験をありがとうございました。

いままで個人的や刈羽村商工会として、柏崎刈羽の発電所や事故後の福島第一近隣の視察へは伺ったこともあります。その際は一方的なインプットの機会が多く、この度は地域の会の委員として伺うという立場として、いままでとは違う思いがあり、また、電力会社や地元議員の方々との対話という形のお時間を頂けた事に感謝しております。

私が委員として重要と考えている避難計画、避難経路に関しても、いままでは柏崎刈羽の情報しか知らず、小さい知識の中から何が最善かと考えていたことへ、立地条件の違う、ましてや福井県特有の、複数個所に広がる原子力発電所への対応をお聞きでき、今後の柏崎刈羽のケースでも活かして行けたらという思い、また、まだ30代の、一般寿命であればあと50年生きる地元住民として関心のある、いずれにせよ今後何十年後かには廃炉という形を迎える原子力発電所の、その後の土地をどう考えるかなどの関電の意見もお聞きでき、貴重な経験と感じながらも、生活の基盤はほかの地にある電力会社の方々、自分はもちろん、子供、孫、ひ孫とこれからも何百年とこの地に暮らす者としての、意識の違いを感じたことも、大きな課題だと認識しております。

#### ➤ 視察風景



関西電力（株）大飯発電所 PR 館  
エルガイアおおいにて



おおい町、おおい町議会の皆さんと



意見交換会の様子



おおい町役場全景